

平成
21年度

全国学力・学習状況調査

結果の概要をお知らせします



※写真はイメージです。

【実施日】

平成21年4月21日

【実施学年・人数】

小学校6年生と中学校3年生
の児童・生徒

全国で約223万人が実施

【問題の内容】

A問題…知識に関する問題
B問題…活用に関する問題
(知識・技能などを実生活の
さまざまな場面に活用する
力)

【学力調査の内容】

実施教科
小学校…国語・算数
中学校…国語・数学

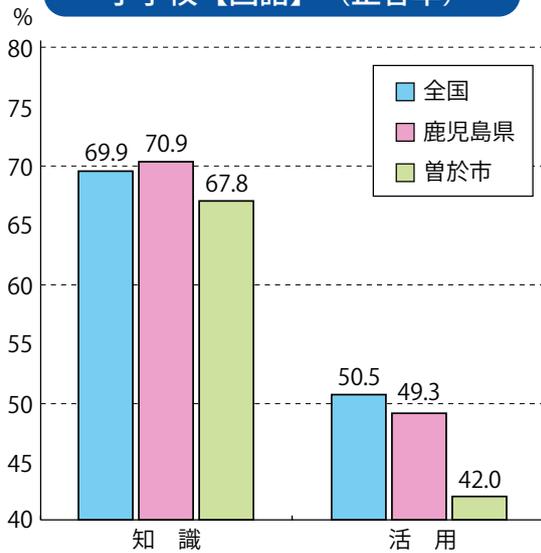
【学習状況調査の内容】

生活習慣・学習環境等に関する
質問紙調査

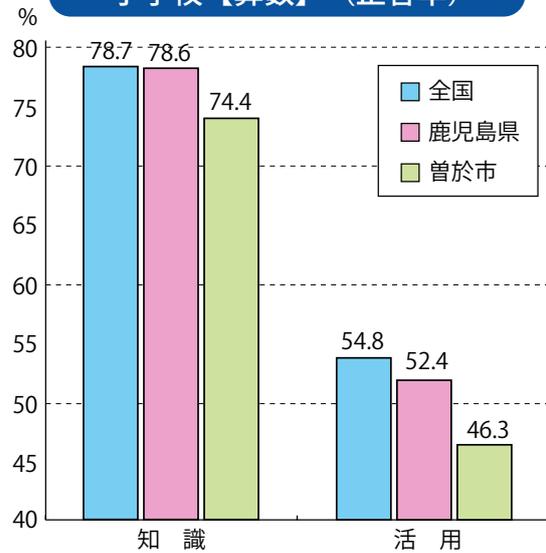
この調査結果は、学力の特定の一部であり、児童生徒の学力のすべてを表しているものではありませんが、結果を把握・分析することにより、教育に関する課題を明確にし、その改善を図ることに役立てていきます。

① 平成 21 年度 全国学力調査

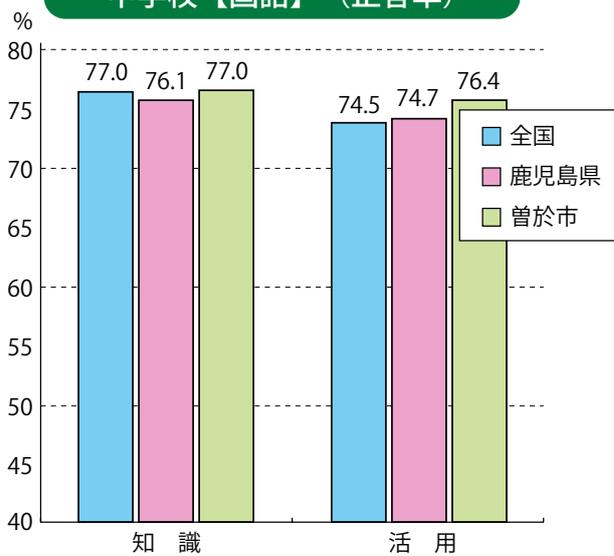
小学校【国語】（正答率）



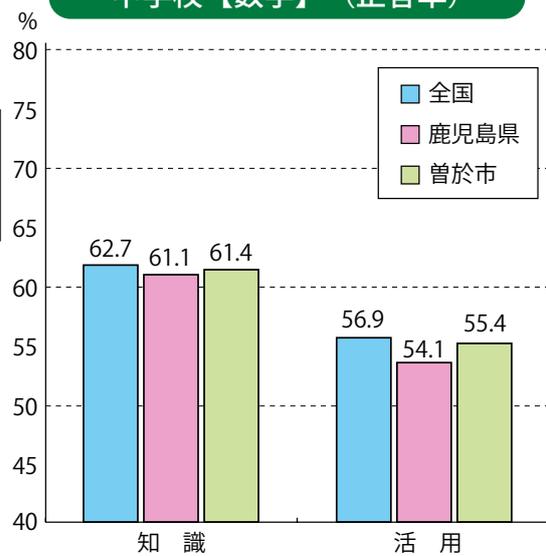
小学校【算数】（正答率）



中学校【国語】（正答率）



中学校【数学】（正答率）



【考察】

平成21年度調査は、過去2年間の調査を受け、課題の見られた内容や問題の正確な理解・判断と解答に当たって表現力が求められる問題が多く出題されています。過年度と比べると各学校の取組も進み、全国、鹿児島県、本市ともに全体的に平均正答率が高くなっています。

知識・技能の定着に関する問題（A問題）では、小学校の算数、中学校の国語において正答率が7割を超えていることから概ね理解していると言えますが、小学校国語、中学校数学においては、正答率が7割を下回っているため、確実な定着を図るための具体的な対策が必要です。

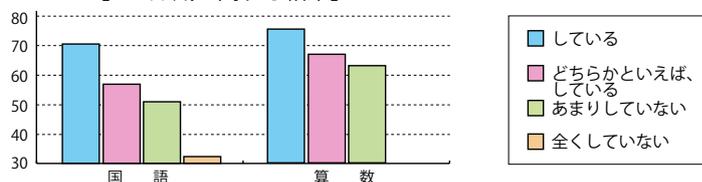
知識・技能を活用する問題（B問題）は、全国、県ともに正答率が低くなっていますが、その中でも本市における小学校の国語、算数の正答率も低く課題があるといえます。中学校においては国語の正答率が全国、県より高く数学も県より高いです。今後は、中学校での取組を小学校でも参考にして指導を行っていく必要があります。

② 学力調査結果と学習状況調査結果の相関【小学校】

(1) 家庭における学校の宿題等への取組と学力状況との相関

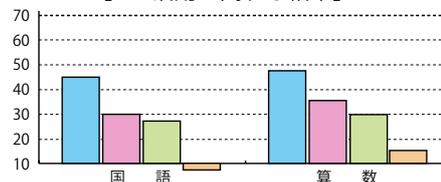
※数値は、学力状況調査結果（平均正答率）

【A：知識に関する結果】



学習時間	国語	算数
している	70.1	76.2
どちらかといえば、している	57.9	67.9
あまりしていない	50.8	63.1
全くしていない	32.2	30.0

【B：活用に関する結果】

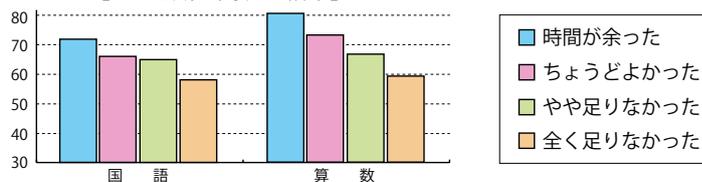


学習時間	国語	算数
している	44.4	48.5
どちらかといえば、している	29.4	36.4
あまりしていない	28.6	29.6
全くしていない	8.0	15.7

＜考察＞ 家庭における学校の宿題等への取組と各教科の正答率の関係については、はっきりとした傾向が見られました。取組が悪くなるにつれ正答率は下がり、全くしていない場合は、国語・算数ともに正答率が極端に低くなっています。家庭における学校の宿題等の取組を始めとする家庭学習の充実が重要です。

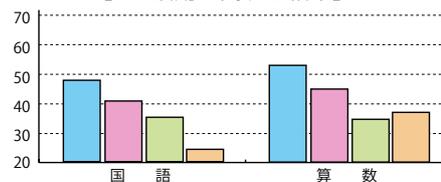
(2) 解答時間と学力状況との相関

【A：知識に関する結果】



解答時間	国語	算数
時間が余った	71.0	80.3
ちょうどよかった	66.6	73.1
やや足りなかった	65.0	67.0
全く足りなかった	58.0	59.7

【B：活用に関する結果】

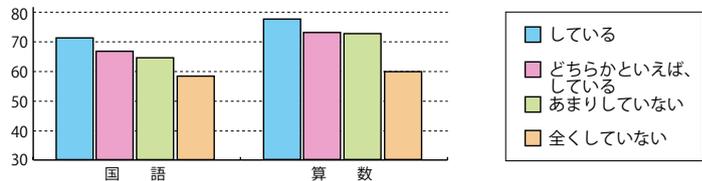


解答時間	国語	算数
時間が余った	47.6	52.5
ちょうどよかった	40.9	46.4
やや足りなかった	36.5	35.7
全く足りなかった	24.4	37.5

＜考察＞ 解答時間と学力状況についても相関関係がでています。国語は「A:知識に関する結果」「B:活用に関する結果」において、設定時間に対して解答する時間が足りないのに比例して正答率が低くなっています。また、算数においてもほぼ同様のことが言えます。学力向上のためには、課題を解くときは時間を設定して取り組む等の、市教委が推進している三速運動（速読、速書、速算）に今後も積極的に取り組むことが大切です。

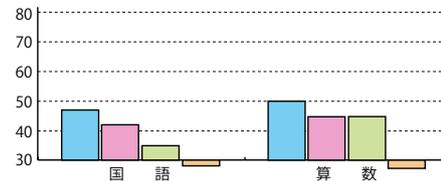
(3) 家族と学校での出来事等に関する会話をしていることと学力状況との相関

【A：知識に関する結果】



会話状況	国語	算数
している	71.2	78.2
どちらかといえば、している	67.7	73.6
あまりしていない	64.8	73.2
全くしていない	58.2	60.0

【B：活用に関する結果】



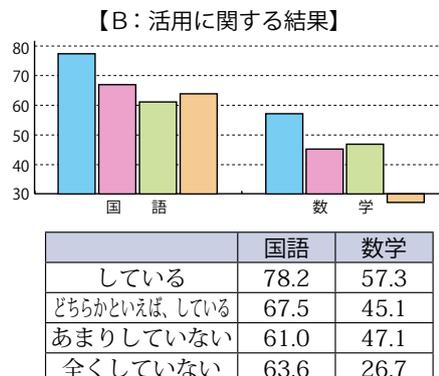
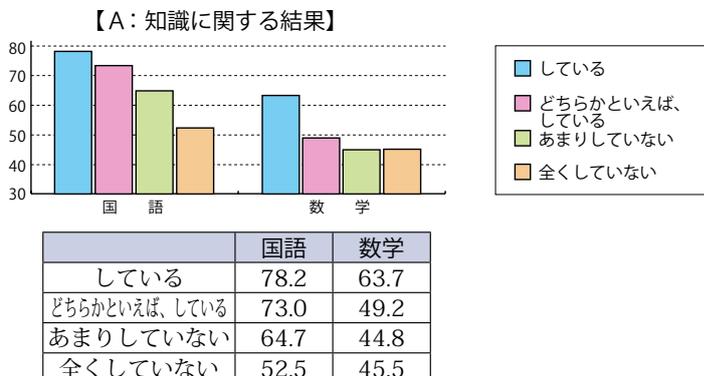
会話状況	国語	算数
している	47.5	50.4
どちらかといえば、している	42.1	45.7
あまりしていない	35.5	45.8
全くしていない	28.3	27.3

＜考察＞ 家族と学校での出来事等について会話をしている児童は正答率も高いと言えます。一方、していない児童は正答率が低くなっています。特に国語も算数も「B:活用に関する結果」においては、全くしていない人は極端に低くなっています。日常の家族団欒における会話も言語活動としての学力、特に思考力・判断力・表現力など、活用力の定着に大きく影響していると思われます。家族の中で子どもの話を色々聞いたり話したりすることも大切です。

③ 学力調査結果と学習状況調査結果の相関 【中学校】

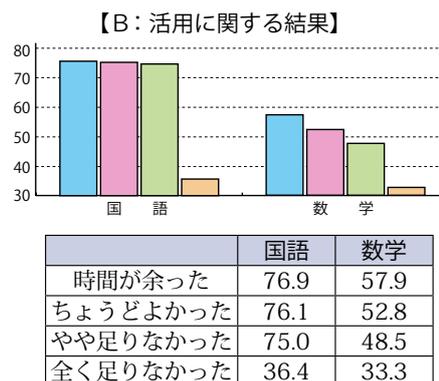
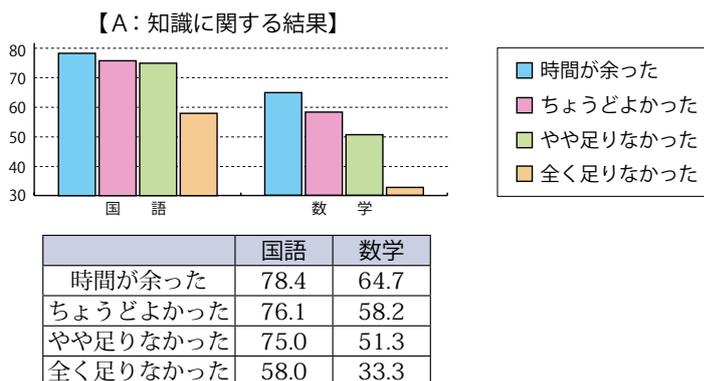
(1) 家庭における学校の宿題等への取組と学力状況との相関

※数値は、学力状況調査結果（平均正答率）



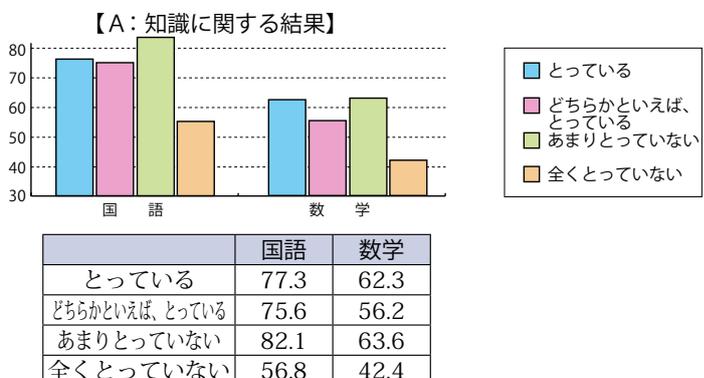
＜考察＞ 家庭における学校の宿題等への取組状況と各教科の正答率の関係については、小学校6年生と同じ傾向が見られました。宿題等を「している」と答えた生徒は、国語・数学の「A：知識に関する結果」、「B：活用に関する結果」においても全国平均より高い正答率ができています。中学生も家庭における学校の宿題等の取組を始めとする家庭学習の充実が重要です。

(2) 解答時間と学力状況との相関



＜考察＞ 解答時間と学力状況について、国語、数学とも「A：知識に関する結果」「B：活用に関する結果」において相関関係ができています。特に設定時間に対して解答する時間が「全く足りなかった」生徒の通過率は極端に低くなっています。学力向上のためには、課題を解くときは時間を設定して取り組む等の、市教委が推進している三速運動（速読、速書、速算）に今後も積極的に取り組むことが大切です。

(3) 毎日、朝食をとることと学力状況との相関



＜考察＞ 毎日、朝食を「とっている」生徒は国語、数学とも「A：知識に関する結果」「B：活用に関する結果」において正答率が高いと言えます。一方、「全くとっていない」生徒は国語、数学とも「A：知識に関する結果」「B：活用に関する結果」においても正答率が極端に低い状況です。朝食の重要性は以前から言われていますが、毎日、朝食をとることが健康にはもちろんのこと、学力にも影響すると考えられます。